

問題発見力と情報収集、整理に向ける意識との関連性

—「日本語表現T2」発表資料を例として—

小林 珠子
KOBAYASHI Tamako

1. はじめに

愛知淑徳大学で開講されている「日本語表現 T2」は、口頭発表とレポート作成を中心に、大学における学修に不可欠な日本語運用能力を養成することを目的とし開講されている。本科目では、11 テーマの中から1 テーマ選択し、複数の文献にあたって調査を行い、その成果をグループごとに発表を行う。発表に際しては、①議論の背景および展開、②各論者の主張と根拠の整理、③議論の批判的検討の3点を含むことを必須としている。グループ発表後には、その内容をもとに4000字程度のレポートを作成する。11 テーマ（注1）のうち、報告内容が昨年度とは大きく異なるテーマが見られた。それは「出生前診断をめぐる議論の批判的検討」である。本テーマでは「中絶の多さ」が問題視されているため、担当する学生はこの点を中心に、②、③をまとめていくことになる。このまとめ方に関して、本年度の学生が行った報告内容には共通する問題点が見られた。それは、収集した資料を批判的に検討する際、中立の立場から客観的に検討することが出来ず、偏った分析に陥るということである。その結果、本テーマが抱える問題点を見出せないまま結論を導き出すという結果を迎えていた。この原因の一つとして、「議論の前提」を鵜呑みにしてしまうことが考えられる。したがって、本稿ではなぜ学生は「議論の前提」を鵜呑みにしてしまうのか、この問題を解消するために今後どのような指導が求められるのか検討していきたい。

2. 「議論の前提」とは

具体的な分析に入る前に、「議論の前提」について説明しておきたい。野矢茂樹は、「議論において共有すべき事実および共有されている意見や見方」を「議論の前提」と定義し、議論をする際には、「議論の前提を点検し、決めつけをはずす」必要があると指摘する（注2）。つまり、批判的検討をする際に重要なのは、「議論の前提」となっているものを見つけ出し、その前提に問題がないか否かを検証することにあると言えよう。本年度「出生前診断をめぐる議論の批判的検討」を担当した学生は、「議論の前提」を把握することは出来ていたのだが、そ

の前提の是非を検証することが出来なかった。次章では、具体的になぜそのような状況が生まれたのか検証していきたい。

3. 事例

本稿では、「出生前診断をめぐる議論の批判的検討」を担当した学生が実際に作成した発表資料やレポート、授業アンケートの結果を取り上げる。また、本テーマを担当する学生が実際に使用した参考文献を取り上げる。

3.1 分析 —発表資料—

発表資料を作成するために、学生が必ず目を通す資料の一つに、『日本大百科全書（ニッポニカ）』がある（注3）。『日本大百科全書（ニッポニカ）』、「出生前診断」の項目では、この診断に対し「識者からは「異常がわかる」と安易な妊娠中絶につながる」、「障害者や命の否定になる」といった意見が出て、倫理論争も起きている」と説明されている。学生はこの記述から、本テーマにおける「議論の前提」として「安易な妊娠中絶につながる」点や、「障害者や命の否定になる」点が指摘されていることを把握した上で、批判的検討に入る。その結果、②各論者の主張と根拠の整理で取り上げられる争点は、「（出生前診断が）命の選択につながるのではないか」、「中絶を正当化する理由は正しいのか」、「中絶は女性の自己決定権の適用範囲なのか」、「優性思想の表れではないか」といったものが多く見られるようになる。争点の分析（批判的検討）をする際には、賛成、反対双方の意見を取り上げ分析していくことになる。昨年度の学生は、中絶が増えることにより生じる問題だけではなく、なぜ妊婦は中絶を選択するのか、出生前診断を希望する妊婦が増加する背景には何があるのかなど、妊婦やその家族側に立った分析まで行うことが出来ていた。そのため、妊婦が中絶を選択する背景には、遺伝カウンセリングが不十分であることや、障害者に対する社会全体のサポートが不足していることなどの問題点を把握することが出来ていた。その結果、「議論の前提」として提示されていた「安易な妊娠中絶」に対して、批判的に検討を行うことが出来ていた。一方で、本年度の学生が行った分析では、中絶

を選択した側（主に妊婦やその家族）に対する分析が欠如し、偏った分析に陥る傾向が見られた。その結果、「安易な妊娠中絶」という「議論の前提」に対して、批判的に検討することが出来ない発表が散見されたのである。本科目において学生が選択するテーマは、マスメディアを通じて耳にしたことはあるが、詳細については分からないものが少なくない。そのため、最初に入手した資料の内容に影響を受け、その内容を鵜呑みにしてしまう傾向があり、この傾向が強まっているのではないかと考えられる。また、批判的検討を行った経験がないため、どのように検討していけば良いのか把握できていないことも原因の一つとして考えられる。この点を考察するにあたり、授業アンケートの結果を参照していきたい。

3.2 分析 —授業アンケート—

本科目では、最終講義の際に授業アンケートを実施している。ここでは、その内容を取り上げ、学生が批判的検討においてどのような意識を抱いているのかを確認したい。

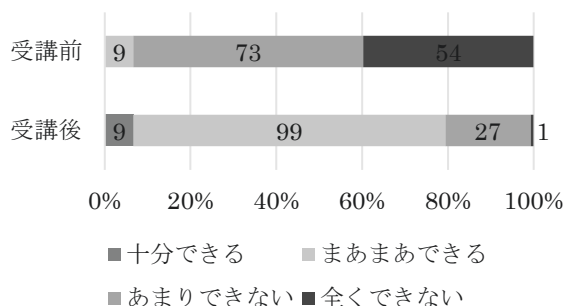


図1 「資料を批判的に検討すること」に対する回答

図1からは、受講生136名のうち、127名（約9割）が本科目を受講する前は、資料を批判的に検討することがあまりできない、全くできないと回答しているが、受講後は108名（約7割）がまあまあできる、十分できると回答していることが分かる。また、「この授業で印象深かったこと、新たに学んだことを具体的に記入してください」という設問においては、「資料を読むときには、著者の主張と根拠の道筋とを正確に理解したうえで、それを無批判に受け入れるのではなく、本当にそうなのかと批判的に検証しながら読むことが大切だと学んだ」、「テーマに沿い、批判的な検討の仕方を学んだこと。初めは何をするかすら全く分からなかったが回を追うごとに、批判的に検討することの効果や意見の説得力が分かるようになった」など、批判的に資料を読むことの意味や大切さを初めて認識することが出来たという回答が多く見られた。以上のことから、受講前はこれまで批判的検討を行ったことの無かったため、その重要性を理解していない学生が大多数を占めていたが、講義を通して批判的検討の重要性を理解し、実践していこうとする学生が増加したことが分かる。「この授業を通して気づいた

自分の課題を具体的に記入してください」という設問では、「論文を読む際に著者の主張に引きずられずに、批判的に読むこと」、「先入観にとらわれやすく、本当かどうかをしっかりと分析することなく、文献を使用してしまうこと」という回答が散見された。批判的検討の重要性に気づきながらも、それを実践する力が不足していると感じている学生が多いことが分かる。また、「自分の意見をしっかりと持って、それをゴールにレポートを作成すること」と言うように、目的意識の希薄なまま調査を進めてしまい、最終的にどのようなまとめれば良いのか分からなくなるといった声も少なくない。今後の指導においては、批判的検討に対する苦手意識を軽減させるための工夫や、目的意識をもって調査を進める必要があることを意識づけることが必要となると言えよう。

4. 今後の課題

本科目を受講する学生の大多数は1年生であるため、批判的検討を一度も経験していないことが多い。そのため、批判的検討とは何か正しく理解しないまま、発表資料の作成に入る場合が少なくない。そのため、まずは批判的検討とは何かを理解させ、早い段階で批判的検討を実践することが望ましい。よって、資料を収集し、テーマに関する基本情報をグループ内で共有する際、それと同時に何が「議論の前提」となっているのかを確認し合い、その前提が正しいか否かを話し合う時間を設けることが必要だと考えられる。なぜなら、「議論の前提」の是非を検討することにより、担当するテーマが抱える問題点に気づくことが可能となるからだ。また、テーマに関する具体的な意見（賛成意見や反対意見など）が書かれた資料を収集する前に、どのような意見があると考えられるかグループ内で話し合うことが必要だと考えられる。話し合いに際しては、担当するテーマに関わる様々な人の立場に立って意見を考えることも重要である。例えば、「出生前診断をめぐる議論の批判的検討」においては、妊婦やその家族、医療関係者、今後出産を考えている人など、幅広い立場に立ち批判的検討を行うことが大切だと指導することが求められるであろう。

注

- 1 「集団的自衛権をめぐる議論の批判的検討」や「裁判員裁判をめぐる議論の批判的検討」など、時事問題を採用している。
- 2 野矢茂樹『大人のための国語ゼミ』山川出版社、2017年。
- 3 「日本語表現 T2」では、必ず入手すべき資料をいくつか指定しており、『日本大百科全書（ニッポニカ）』はそのなかの一つである。